フランス無声映画
名作鑑賞会

昭和36年12月11・12日
場所　日仏会館ホール
主催　国立近代美術館
　　日仏会館

アンダルシアの犬<1927>
監督　ルイス・ブニュエル

“アンダルシアの犬”はフランス無声時代の末期に盛んだった前衛映画の最後のそしてもっとも注目すべき作品である。これをつくったのは、二人のスペイン人、ルイ・ブニュエルとサルバドール・ダリである。ブニュエルは現在でもメキシコおよびフランスで映画をつくっている。ダリがその後シュルレアリスムの画家として世界的に名声を博したことはだれでも知っている。要するにこれはスペイン的残酷のシュルレアリスム的、そしてやや観念的な視覚化である。これが他のフランス前衛映画とちがう点である。しかしそれでもこれを“説明”することはやはり無理である。これを白日の夢と解釈することは一番容易である。これをフロイト的精神分析だというのもうなずけないではない。

だが、わかい女の目を剃刀の刃が切ることがなにを意味するか、というような質問に答えるひまはだれにもない。それよりもロートレアモンの言葉“解剖台の上でこうもり傘とミシンが出合ったような美しさ”を頭に入れて見た方が賢明であろう。それでなければダリの絵をおもいだしつつ、これを見るのも一興である。さらにもしその人がクレールの映画を見ているならば、18世紀人クレールの“幕間”とこれは、アンチテーズなのではないか、こう考えてもいいだろう。しいてこれに総評をくわえて安心したい人はこれが“八つあたりインテリ”のすがたであると考えきめることも、そうまちがいではあるまい。しかしこの作者ブニュエルが第二次大戦後メキシコで“忘れられた人々”<1950>を発表したことをお忘れなく。

イタリアの麦わら帽子<1927>
監督　ルネ・クレール

“イタリアの麦わら帽”子はフランス無声映画の傑作の一つである。クレールはこれをウージェーヌ・ラビッシュおよびマルク＝ミシェル合作の喜劇から脚色し、アルベールプレジャンガ主演した。いまや結婚式をあげようとするファディナールの馬がある人妻の麦わら帽子を食い切った。人妻の恋人が同じものを買って返せと厳談する。そこでファディナールはパリ中を駆け廻り、やっと見つけたのが自分の嫁さんの祝いの品の中だった。というこれはフランスのヴォドヴィル喜劇プラス　マック・セネット喜劇の“追駆け”といった感じのクレール式喜劇。これをバルデーシュ＝ブラジャックは、“フランス・ブルジョアジーのロシヤバレー”と呼んだ。

クレールの作品にはヴォドヴィル喜劇とロマンティーク喜劇の二系列があるが、これはそのヴォドヴィル喜劇の最初の代表作である。そして内田岐三雄<きさお>もいうように“クレールの人物の動かし方は全く卓越したものである……それは操り人形の名人が自在にその人形を操るにも比喩えられよう”。クレールがその後もラビッシュ的題材をいくどか映画化したわけは、人物の動きをバレー化し、リズム化されたモンタージュを行うのに好適だからなのである。この系彼の列の映画をあげればトーキー以後に“ル・ミリオン”<1931>，“自由を我等に”<1932>、“沈黙は金”<1947>、“夜ごとの美女”<1952>がある。

運営委員　飯島　正